

4 ホルモン処理

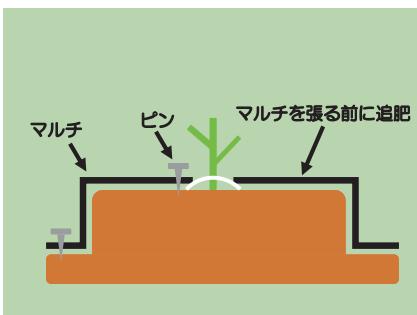
- トンネル被覆を行っている間は、風媒や虫媒での交配が期待できないため、トマトトーン等の植物ホルモンを雌しべに散布し人工交配を行う。
- トマトトーンの場合50倍に希釈し、1番花から4番花まで開花当日に処理を施す。
- ホルモン剤を2回以上処理すると奇形果等の原因となるため注意する。花の色の濃淡で処理済みかどうかを判断する。



ホルモン処理はトンネルの側面に穴を開け、霧吹きのノズルを差し込み散布する

灌水のポイント

- 定植時の灌水で十分に土壤を湿らせておくことで、トンネルを設置している間は、ほとんど灌水は必要ない。
- トンネル内の表土の様子を見ながら、乾燥するようであればトンネルの穴から株元へ灌水する。
- トンネル除去後、生育初期は株元に、その後はマルチの下など根の広がりに合わせた場所に灌水する。
- 乾燥が続くようであれば畝間に通水し、園場全体に水を行き渡らせる。



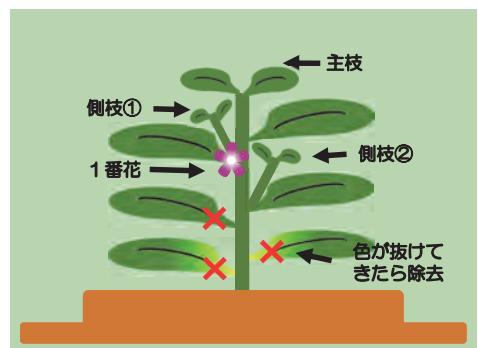
はま合わせのポイント

- マルチを張った後は雨水が入り込みにくくなるため、雨の後や灌水後にマルチングを行うと良い。
- 次項のアーチパイプの設置作業と前後しても構わない。
- 透明マルチの上も覆うよう黒マルチを掛け合わせると株元の雑草の発生も防ぐことができる。

- 【トンネル除去】
- 5月下旬、葉がトンネルに触れ始めたらポリフィルム及びトンネル支柱を除去する。
 - 急な温度・湿度変化はナスに大きな負担をかけるため、トンネル除去までには、換気穴を20cm程度に広げ、外気に慣らしておく。
- 【はま合わせ】
- トンネルを除去した後、畝上に追肥を行う。
 - 黒マルチや稻ワラでマルチングを行う。
 - 黒マルチを使用する場合はピンで固定し、稻ワラは麻ひも等で固定する。

6 トンネル除去

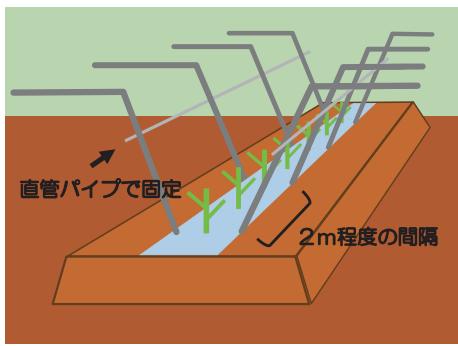
- 主枝、1番花とその1節下位の側枝の3本仕立てとする。
- 生育初期には、1番花より下位の葉を健康に保つことで、上位葉の生育を促進する。
- 下位の葉は、色が抜け黄緑色になついたら側枝とともに除去する。



作業はトンネル内で行う

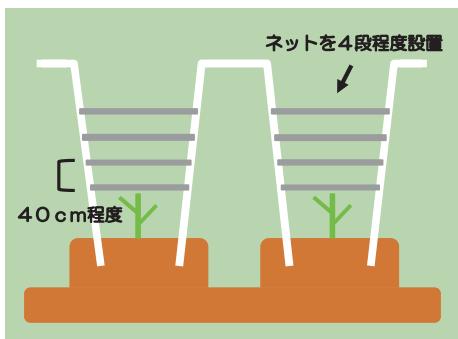
5 整枝①

7 アーチパイプ設置



中央のマルチに沿ってアーチパイプを刺す

(注) はま合わせを先に行った場合は紐などを目印に真っ直ぐ

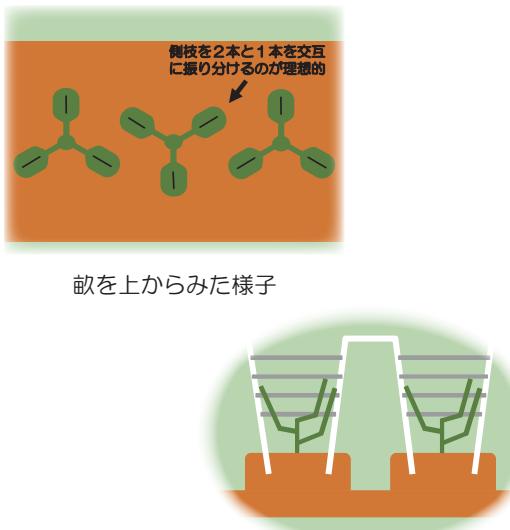


40cm程度の間隔でネットを張る



上から50cm程度のところに直管パイプを渡し固定する

- ・ナスの誘引は専用のアーチパイプを利用する。
- ・2m程度の間隔で畝を跨ぐようにパイプを刺す。
- ・アーチパイプの上から50cm程度のところに、直管パイプを水平に固定する。
- ・株上のパイプ間に胡瓜ネットを4段程度張り、誘引を行っていく。



畝を上からみた様子



整枝作業の様子

(注) 葉が重なると下の葉は光合成の力が弱まるとともに、湿気が溜まり病気の原因となる

株全体に光が当たるようにネットに枝を通す



(注) 葉が混み合っていなければ無理に摘葉しなくて良い

8 整枝②・誘引

- ・3本立てを基本とし、側枝が畝の向きに対し垂直方向に交互に2本、1本となるよう株を振り分ける。枝の方向により、振り分けで負担が掛かるようであれば、無理のない範囲で誘引する。
- ・整枝作業は側枝の着果節位の上で摘心を行うことを基本とし、日当たりや風通しを考慮して、葉が重なり合わないように行う。

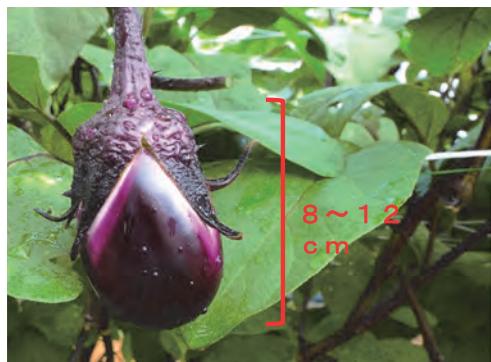
整枝のポイント

- ・一度に多くの葉や枝を落とすと木に負担が掛かるため、1日に落とす葉数は3枚程度を目安にこまめに行う。

9 収穫



花托部を親指で押すと、はさみを使わずに収穫できる



8~12 cm程度で収穫



花落ち部分は病気の発生源になりやすいため、できるだけ取り除く



コンテナを2個用意し、ナスと整枝後の茎葉を分けておくと効率的

- ・収穫は早朝に行う。
- ・収穫物を傷つけないないようにゴム手袋を着用する。
- ・収穫量の少ない日は、同時に整枝作業を行うと良い。

10 調整・出荷



等階級別に箱を複数用意し、選別と同時に箱詰めを行う



(注) 傷や変形のあるものは出荷できない



向きを揃え丁寧に並べていく



出荷まで日陰で保管



完成品

- ・収穫後は、速やかに日の当たらない室内へ運び調整作業を行う。
- ・傷、虫害のあるものや、形の悪いものを取り除きながら、規格・級ごとに丁寧に箱詰めを行う。
- ・箱詰め後は出荷まで日陰で保管する。

11 採種用母本選抜

7月上旬頃に形や色つやの良い果実を選び目印をつける。
1果から500粒程度採種で
きることを考慮し、必要数の
果実を確保する。

9月下旬頃（着果から約90日
後）、果実色が黄味がかかる
たら収穫を行う。



12 採種

【追熟】

種子の充実のため、収穫後1～2週間程度は日陰で追熟を行う。

【採種】

追熟後、果実が軟らかくなつたことを確認し、種子を傷つけないよう手で裂いていく。

水を張った容器を用意し、断面を水で濡らしながら、指で種子を落としていく。

水に浮く種子は未熟である可能性が高いため取り除き、水に沈んだ種だけを集める。

果肉等の不純物を取り除き、水気を取つた後、日陰で乾燥させる。



【保存】
種子は、密閉されていない容器や紙封筒、布袋等に入れ、湿度40%以下、温度15度程度の環境下で保存する。
採種後、3年程度で発芽率が落ち始めるので、早めに使い切る。

14 病害虫防除

日常の収穫や管理と併せ、生育状況等を観察し、病害虫の早期発見と初期防除に努める。
病害虫は、年によつて発生の程度に差はあるが、繰り返し発生するので、発生時期や防除実績を日誌等に記録し、翌年以降の防除に活かす。

農薬は「野菜類」または「ナス」の登録のあるものを使用する。
農薬の使用にあたつては、最新情報を入手するとともに、ラベルの記載内容を必ず確認して使用する。

農薬の最新情報は、農林水産省「農薬コーナー」を参照。

URL : <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

アーチパイプやマルチを撤去する。
株を抜き圃場の外へ搬出し処分する。
同じ圃場で同一の作物の栽培を続けると、連作障害が発生しやすくなる。連作は最長でも4～5年とし、適正量での施肥管理、有機物の投入、客土や深耕等を行うことで連作障害を回避する。

栽培を重ねると、徐々に下層の土壤が固まり、排水性が低下する。10年に1度は栽培終了後に、重機で深さ1m以上の天地返しを行う。下層の清潔な土壤を表土にし、下層土が軟らかくなることで、排水性が改善される。

連作障害

- ・特定の肥料成分が多かったり、不足した状態が続くと、微量要素の過剰症や欠乏症が発生する。
- ・特定の細菌やウイルスなどが土壤中に増加したり、特定の土壤害虫が生息地として定着することで、作物が侵される。



【オオタバコガ】

若齢幼虫は新芽や葉を食害し、中齢期以降は果実を食害し内部に侵入する



幼虫※

成虫

【主な病気・害虫】



【青枯れ病】

葉色を保ったまま日中高温時の萎れとして症状が現れ、次第に萎れが回復しなくなる



【褐色円星病※】

葉のみに発生し、周縁が褐色、中心部が灰褐色の病斑が現れる

加賀野菜「へタ紫なす」栽培マニュアル
発 行 平成30年3月
発行元 金沢市
監 修 林 繁樹
編 集 金沢市農業センター
金沢市下安原町東1471
電話 (076)249-2744
FAX (076)249-4470

